鳥取市認知症施策推進計画(案) 市民政策コメントについて

1 実施期間	令和6年12月23日(月)～令和7年1月14日(火)
2 意見等の総数	3名
3 意見等の項目・区分別件数	下記のとおり

項目	件数
総件数	8
計画策定にあたって	2
第1章 計画について	
1 計画の目的と国の動向	1
2 計画の期間	
3 計画の位置づけ	
4 計画ができるまで	
第2章 めざすすがたと目標	
1 めざすすがた	
2 基本的な考え方	
3 目標の体系図	
4 目標と取組み	1
目標1 認知症であることや、自分の思いを必要な人に伝えることができる	1
目標2 本人同士が出会い・つながり、経験や工夫を活かしながらやりたいことに挑戦し続けることができる	1
目標3 自分自身の暮らしのさまざまな場面でかかわる人とともに考え、暮らしやすい環境についてともに創ることができる	
目標4 前向きになれるような良い情報を入手し、心身の状態・住まいの場所にかかわらず自分の意思で決めることができる	2
第3章 計画の推進・評価	
1 計画の推進について	
2 計画の評価について	
第4章 資料	
その他	

No.	意見(概要)	意見に対する本市の考え方
1	<p>今もなお、「ボケ」「痴呆」、そして「徘徊」という言葉が日常的に人々に口にされている現実を直視し、小中学生を対象とした正しい認識の啓発機会が不可欠だと思う。これは計画で掲げられているすべての目標の原点である。</p>	<p>本市では、認知症に関する正しい知識及び認知症の本人への理解を深めていただくため、「認知症サポーター養成講座」にて認知症の本人の声を伝えるなど、小中学生をはじめとした若い世代へも実施しているところです。</p> <p>若い世代も「新しい認知症観」を実感できるよう、認知症の本人の声を聴き、学び合う機会を増やすなど、引き続き取り組んでまいりたいと考えています。</p>
2	<p>「目標2」の取組内容に「本人の暮らしにかかわる人同士(家族同士、専門職同士など)が思いを語り合い、気づきや活力を得られる機会の充実」とあり、最も身近な家族として思いを語り合える場はとても大切だと痛感しているが、認知症の家族によるピアサポートを、個別の機会を含めて、よりきめ細やかに実施していただきたい。</p> <p>治療法のない病だから、という諦めの中で互いに慰め合うのではなく、最新医療の情報共有を含めて、家族がひと握りでも希望を持てるようなピアサポートの場ができるよう願う。</p>	<p>家族も本人とともに希望をもって暮らし続けられるよう、「認知症家族の集い」の開催等、家族同士のピアサポートの機会の拡充に引き続き取り組んでいきます。</p>
3	<p>鳥取市の「施策」の推進計画であるから、鳥取市がどのような施策を実施するか、計画の中で示すことが必要。</p>	<p>この計画は、新しい認知症観の普及・浸透を図るための施策について、「第2章 4 目標と取組」の各目標における取組内容や評価指標を位置づけています。</p> <p>施策の推進に向けては、認知症の本人を含めたさまざまな立場の人と対話を重ね、ともに検討・実践・評価しながら取り組むとともに、その状況を市民に広く発信していくこととしています。このことについて、「第3章 計画の推進・評価」に記載します。</p>
4	<p>目標4の中に「意思を表すことが困難になったとしても思いが尊重されるような仕組みを整備します」とあり、大事なことであるが理解者を増やしていくのは難しいことでもある。</p> <p>そこで、いくつかの事例を提示しながら説明すると、理解が進みやすくなるのではないかと。啓発パンフレットのようなものを作成して、この計画の普及・浸透を図っていただきたい。</p>	<p>本市では現在、認知症の本人等とともに検討・作成した「認知症相談安心ガイドブック」の普及に取り組んでいるところです。</p> <p>ご提案いただいた事例の提示等の分かりやすい内容となる工夫について、認知症の本人とともに検討しながら、様々な方法で本計画の普及・浸透を図っていきます。</p>

5	<p>「鳥取市らしく」「本市の実情に即した」とあるが、本市の実情に即した「認知症施策推進計画」とは具体的にどのようなものか。また、それはこの計画のどの内容に反映されているか。</p>	<p>本市では、これまでも認知症の本人とともに、さまざまな立場の人と対話を重ねながら取組を展開しており、これが「鳥取市らしさ」であると考えます。</p> <p>これについて、本計画で掲げた各目標の達成に向けて対話・連携・協働しながら取り組んでいくこととして、計画全体に反映させています。</p>
6	<p>「計画策定にあたって」の文章中に「認知症の本人を「支援してあげる」、自分は認知症だから「支援してもらっただけの人」、認知症に関することは「誰かがしてくれる」のではなく…」と記載されているが、こうした文言がなぜ今表現されるのか。</p> <p>認知症の人の尊厳や意思決定支援などを言われるようになって久くなる。実際には、ピアサポート、本人ミーティング、本人ワーキンググループの活動に取り組まれている。</p>	<p>認知症に関する新しい考え方については、本計画や、国の「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」の施行を契機に、認知症の本人とともにより一層の普及・浸透を図ることが重要と考えております。</p> <p>今後もピアサポート、本人ミーティング等の機会の拡充を通して、本人の社会参画が増え、本人の声を起点とした地域づくりが進むよう取り組んでまいります。</p>
7	<p>第1章 計画について</p> <p>「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」の基本理念(第3条)について、具体的にわかりやすく解釈されているが、元は法律なのでもっと丁寧な表現が望ましいのではないか。</p> <p>例えば、「人間としての尊厳をベースに」「本人も社会の対等な構成員として」「本人、家族などが地域で安心して日常生活を送るために」「バラバラではなく、さまざまな分野がともに」等とうたわれているが文章の締めが無い。</p>	<p>より分かりやすく丁寧な表現となるよう、国の「共生社会の実現を推進するための認知症基本法 解説版」(令和6年12月発行)の内容を踏まえて修正します。</p>
8	<p>目標4について、「良い情報」とは誰の視点か・誰が判断するか抽象的に感じる。「良い」は文章に必要か。</p>	<p>「良い情報」は、認知症の本人が自分らしく暮らすために、自分自身が前向きになれる情報のことを指しています。</p> <p>ご意見を参考に、「自分自身にとって前向きになれるような良い情報を入手し～」に修正します。</p>